

## 第3回 市立高等学校等改革検討委員会 議事録

### 1 日時

令和2年(2020年)1月21日(火)午後3時00分～午後5時00分

### 2 場所

熊本市役所議会棟2階 議運・理事会室

### 3 委員(50音順)

出席委員：荒瀬委員、池田委員、川上委員、坂本委員、田中委員、苫野委員、永村委員、野副委員  
福西委員、矢野委員、山川委員、吉山委員

欠席委員：高智穂委員

### 4 配布資料

資料1 会次第 等

資料2 事務局説明資料

### 5 次第

開会

(1) 委員長挨拶

(2) 事務局説明

(3) 意見交換

市立高等学校及び専門学校改革の方向性について

閉会

<p>〔開会〕 〔事務局〕</p>	<p>定刻となったので、これより第3回市立高等学校等改革検討委員会を開会する。</p>
<p>〔会議の成立〕 〔事務局〕</p>	<p>本日は12名の委員が出席しており、委員定数13名の半数以上が出席している。よって「市立高等学校等改革検討委員会運営要綱」第6条の規定により、本日の会議は成立していることをご報告する。</p>
	<p>また、同要綱第7条の規定に基づき、本委員会は公開とさせていただきます。</p> <p>今回の検討内容は、資料1の9ページに示しているように、これまでの議論をもとに事務局から改革のパターンを提示し、改革の方向性について議論していただくこととなっている。</p>
	<p>議事に移るので、進行を委員長にお願いする。</p> <p>はじめに、苫野委員長から一言頂戴したい。</p>
<p>〔委員長挨拶〕 苫野委員長</p>	<p>早いもので第3回となり、最初は本当にたくさんの意見をいただいた中で、前回大きく三つの柱がみんなでコンセンサスがとれて、よい方向でまとまっていたと思う。こちらをさらに具体的にしていって、答申にしたいと思う。今日と次回のあと2回しかないが、より豊かな議論にしていきたいと思う。</p> <p>せっかくなので最初に、考えていることを忘れないうちに言っておこうと思う。</p> <p>まず、私は色々ところで改革に携わっているが、これまで30年間の教育改革の大きな反省として、「検証しない」という問題がある。「改革やりっぱなし」という問題は、全国津々浦々色々ところで見られる。せっかくこの改革検討委員会があるので、改革が進んでいく要所要所で、しっかりと検証して、検討し直し続けるということ。スピード感が大事な時もあるが、必要に応じて立ち止まるということも大事であるということ念頭に置いておきたい。</p> <p>それと、これは第1回の議論でも出たことで、改めて底に敷いておきたいと思うことが、今回も「人材育成」という言葉が多用されているが、「人材」というと、非常に強い表現のように感じる。それに対して苦しむ子もきっといると思うので、もっと一番の土台にはケアの気持ちや、学校が全ての人を大事にしている環境であるということ底に敷いて改革検討していきたいという思いがある。</p> <p>もう一つは、私は教育学者なので、こういった有識者会議はそれぞれ色々な専門的知見や経験知を持ち寄って改革をしていくが、経験知だけで物事が動くことがないように、先ほどの検証ということもそうだが、「それは本当に妥当なことなのか」「これからの時代にとってよいことなのか」「効果のあることなのか」こういったことは専門的な学者の力を活用しながら、そのために私もいるのかと思うが、この三つを底に敷きながら議論できたらよいということをまずは言っておきたい。</p>
<p>〔議事〕 苫野委員長</p>	<p>では議事に移る。</p> <p>意見交換に入る前に、事務局のほうから資料の説明をお願いする。</p>
<p>〔事務局説明〕</p>	<p>—事務局説明—（資料2に基づく説明）</p>
<p>〔意見交換〕 苫野委員長</p>	<p>では、意見交換に移るが、今日は非常に盛りだくさんであるため、皆さんできるだけ簡潔にお願いできればと思う。また、こちらの事務局の資料は非常に複雑というか、専門用語もたくさん出てくるので、理解が難しい場合は、一番最後のページの用語解説を参考にさせていただきたい。</p> <p>本日は、事務局から提案された例をもとに、改革の方向性について議論していく。本検討委員会への諮問内容は、市立高校・専門学校における「人材の育成」と「必要な改革」の2点である。</p>

これまでたくさんのお意見を伺っていただいたので、今回は答申へ盛り込んでいくということを念頭に置きながら、具体的な議論をまとめていきたいと思う。

今回は、指名して意見を求めることも多々あるかもしれないので了承願いたい。

まず、最初に資料の5ページから8ページの「人材育成の方針」と「学科・コース」について意見交換していきたい。

まずは高校について、その後専門学校について議論したい。5ページから7ページの高校についてご覧いただき、20分ほど議論したいと思う。

今回の改革の三つの柱のうち、皆さんで深く合意できた「探究を中核にしていく」という方針について、前回私が提案したアメリカの学校の映画も観ていただいた方も多々と思う。こちらについても念頭に置いて議論していきたいと思う。

まずは、突然の指名で恐縮だが、荒瀬委員が探究の第一人者でいらっしゃるの、提案資料に関する意見も含めてご意見をお願いしたいと思う。

今探究は一般化しており、学習指導要領にもたくさん出てくる。一つ、委員長がおっしゃったことと関わるが、5ページと6ページ、専門学校もそうだが、「人材の育成」という言葉がたくさん出てくるが、必ずしもこれは「人材の育成」ではなく、「資質・能力の育成」と書き改めた方がよいところがあるような気がする。例えば、5ページの高等学校の真ん中、「熊本の未来を担う人材の育成」というのは、これは「人材」だと思ふ。地域に残って、そこで何らかの形で熊本の未来に関わっていくのだろうし、出て行く方も当然いるのだから。しかし、上の二つ、例えば「個性や適性を生かし自らの人生を切り拓く人材の育成」は、全ての人に必要となってくるものだから、これは、それができる人だけを育てるのではなく、全ての人に力を付けていくのではないかという風に思う。同様に「グローバル化に対応する～」や「情報化社会に対応する～」についても、「人材」の育成ではなく「資質・能力」ではないかと思う。他にもそういったところがあるので、検討いただければと思う。

6ページの一番上に「探究科(仮)」とあるが、ここで、「個性や適性を生かし自らの人生を切り拓く資質・能力」と読み替えてみても、何をするのかここでは具体的に表れないので、答申にしていく段階では相当具体の記述が必要になってくると思う。具体の記述というのは、教育課程をどのように組んでいくのか、細かなものではないが、柱となるようなものが必要になってくるのではないかということ。掛け声だけに終わってしまっただけではいけないので、是非、具体的にどういう教育課程の軸を置くのかということを考えていただくこと、すなわち、3年間の学びを経た段階で、どういう生徒に育てているのか、どんな資質・能力を持った生徒に育てているのかということが、答申の中で見えてくる必要があると思う。

同じく6ページの、「普通科」のところは国でまさに検討の最中なのだが、ここに「国(教育再生実行会議)」とあるが、実は中教審の「新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ」というところで検討している。大学の場合、三つのポリシーというのは、「アドミッションポリシー」「カリキュラムポリシー」「ディプロマポリシー」だが、高等学校の場合は学位を授与しないため「グラデュエーションポリシー」という言葉を使って議論している。グラデュエーションポリシーというのは、卒業時点でどういう力を付けているかという、先ほど申した資質・能力での生徒像をどう明らかにしていくか、そういう発想で議論をしている。中間段階なので具体のことを申し上げにくい、要は設置者、熊本市教育委員会がどのようなスクールミッションの再定義をするのか。今まさにここでの取組というのはスクールミッションの再定義であるが、どの学校がどういう学校であることが必要なのかということ、検討委員会を設けて考えている。スクールミッションの再定義というのは、学校の使命を明らかにしていくことで、これは市民に対する責任を持っている設置者が明らかにしていくわけだが、それに基づいて具体的に、先ほどの三つのポリシーとも関わるが、どのような形で生徒を入学させるのか、例えば、不登校の生徒を入学させようと思ったら、中学校からの報告書を見るのか見ないのかといったような、そういう具体の話も出てくるし、どのような生徒を入学させ、どのようなカリキュラムを持ち、3年経ったらどのような力を付けて卒業させるのか、という、それがスクールポリシーである。

再定義されるスクールミッションに基づいて、各学校と設置者が話し合う中で、新たなスクールポリシーを打ち立てていくという方向で、現在議論が進んでいる。そのあた

りを視野に入れていただき、熊本市の取組が全国的に見ても先導的であるという形で、よいお手本を作っていたらと思う。

苦野委員長

ありがとうございます。私も最初申し上げたとおり、「人材」という言葉に抵抗があり、元々「人材の育成」という文脈で来たのでなかなかそこに異を申すのは難しかったが、やはり教育に本来「人材育成」という言葉はなじまない。特に義務教育はそうである。ただ、高校以上になったらいくらか人材という言葉が入ってもよいかと思うが、そういうことは大事にしていきたい。荒瀬委員のおっしゃるとおりかと思う。

あと一つ、スクールポリシーの話について、基本的な一番の上位が、事務局が用意した「教育の基本理念」の、「自ら考え、主体的に行動し、多様な人々と協働しながら、自らの人生やよりよい社会を創造する力を育てる学校」のところである。これをブレイクダウンしていき、学校の特色としてこの三つ。これも三つのポリシーに、カリキュラムポリシーのあたりになるかと思うが、整理していくことも可能かと思う。

我々の中で、どの段階を議論しているか共通理解を持ちながら、随時イメージを共有しながら議論を進められたらと思う。

中学校と高校の接続という話も出たので、山川委員から意見を伺いたいがいかがか。

山川委員

前回委員長から提案のあった映画を観て、確かにすごいなと思ったが、実際にあのようなことをするとなった場合に、教育課程をどのようにしていくのだろうかと思った。

明日から私立高校の専願・奨学入試が本格的に始まるので、今日は校長として激励してきたが、教育委員会事務局が作成した資料を昨夜見て、改めて1回目と2回目をよく整理されたなと思った。資料の①「人材育成方針及び育成する資質・能力」は、今までの議論を本当に凝縮してあると思うが、ではこれをどういう教育課程で、どういう学科を編成してするのかということを中心化していかなければならないと思う。

苦野委員長

ありがとうございます。具体化していくのは、なかなか難しいところがある。あと、私たちの検討委員会でどこまで詳しく、細かく答申をするかということも難しいところではあるが、大きな方向性は考えていけたらと思う。

よろしければ、その前の「人材育成」という観点もあるので、坂本委員からもご意見をいただきたい。

坂本委員

改めて、今日、冒頭から「人材」という言葉に対する意見が出ていたが、諮問自体が「市立の高等学校・専門学校でどのような人材を育成したらよいか」という諮問の仕方なので、それに答申すべきは、「人材の育成」という返しにならざるを得ないと思っている。そのためにどのような資質・能力、といった構造をもっと明らかにしないと、今一緒に並んで並んでいる感があり、①のところでは「人材育成方針及び育成する資質・能力」と並列して書いてあるが、実はそこに人材と資質・能力等の概念のレベルが違うのだと、聞いていて思った。そういうことは、今回「市立ならでは」というところで整理をすべきではないか。「市立ならでは」のスクールミッションとして、どういう人材を欲しいのだという熊本市としての身勝手な方針を出してよいのではないか。それに対して我々が、「こういう資質・能力が必要」という答申を出すと関係がすっきりすると思う。

苦野委員長

ありがとうございます。それでは、自由にご発言いただきたい。

田中委員

大学院生であるが、総合学科のことを修士論文で扱っているもので、非常に興味深くこの資料を拝見している。「資質・能力」とか「人材」という言葉の扱いについては、難しいところもあると思いつつも、私が非常に興味深かったのは、やはり、総合学科というところを打ち出していること。ただ、私が研究していく中で気になっているのが、総合学科が20～30年位前にできて、全国に380校位あるが、総合学科の高校に通う生徒の数は全体の数%である。元文部官僚の寺脇研氏が計画をされた時には、普通科を全て総合学科にしたいという考えがあつて始められたそうだが、まだ数%であるという印象がある。これはどういうことかと私なりに研究しているが、その中の要因の一つに考えられるのが、総合学科について教員の理解が進んでいないのではないかということ。

	<p>今回のこの改革に関しても、教育委員会レベルから「こういう風にしますよ」と言った時に、現場の教員が、自分達の学校がどういう風に進んでいくのかということをしかり噛み砕いて生徒にちゃんと伝えて、現場の人達が置き去りになってしまうような内容であってはいけないと思う。</p>
苦野委員長	<p>ありがとうございます。当事者の高校生の皆さんにお伺いしたいと思うが、イメージは湧くだろうか。もし良かったら、矢野委員お願いしたい。</p>
矢野委員	<p>今、資料を見ていて、「探究科」や「創造表現科」といった、今までにない、これから出てくるものだと思うが、自分に馴染みがないものについての話なので、実感が湧かないというのが正直なところだが、先程「Most Likely To Succeed」を観て、探究やプロジェクト学習等の重要性がよく分かったので、これからの高校や専門学校には「探究科」が必要になってくるのではないだろうかと思う。</p>
苦野委員長	<p>ありがとうございます。野副委員も意見があればお願いしたい。</p>
野副委員	<p>正直、実感はないが、「探究科」や「創造表現科」といった新しい科を見ていて、ワクワクする。特に「探究科」は、探究学習というものが今後の高校に必要なになってくるのかなと感じた。</p>
苦野委員長	<p>一つ確認だが、恐らく「探究科」という学科を作ったからといって、ここだけが探究をするということではなく、三つの柱に「探究的な学びを推進し、社会と積極的に関わっていく学校」というのを打ち出しており、全ての学科・コースにおいて、探究というものをカリキュラムの中核にしていくけれども、中でも「探究科」というものを設けてはどうかという事務局からの提案だという風に思う。</p> <p>これに関しては、そういった学科・コースにせず、普通科の中でそういったカリキュラムをしてもよいのではないか、という意見もあってよいと思うので、色々なパターンを考えて、市立学校としてどうあればよいかというアイディアを出し合っていければと思う。</p>
荒瀬委員	<p>新しい学習指導要領では、全ての小学校、中学校、高等学校で探究型の学習をすることになっている。だから、「探究科」を作るか作らないかというのは、実はあまり大事な話ではない。「探究科」というのは「その他の専門学科」という分類になる。普通科目と専門科目と一緒に学ぶというのが専門学科であるが、専門学科を作るか作らないか関係なしに、全ての小学校、中学校、高等学校で探究型学習を進める。「古典探究」など、科目名に探究と名の付くものもあるが、学習指導要領は、名前を付けたか付けていないかではなく、全て探究型学習をするということを明記しているので、どこの学校でもそれが行われていくことになる。「探究科」ということにするならば、敢えて、なぜ、今「探究科」なのか、という理由が必要になってくると思う。</p>
苦野委員長	<p>ありがとうございます。これまでの議論を踏まえていかがだろうか。もう少し高校についての意見をいただければと思うが。</p>
永村委員	<p>「探究科」というのは、やがて時代が追い付いていくから、今はものすごいジャンプに見えて、ドキドキしてしまう部分とか、どうやって具体化するか不安なところもあるかもしれないと思うが、時代の流れを意識すると、これが主流になっていくのではないかという予感がする。</p> <p>そして、「グローバル探究科」の方に「IB（国際バカロレア）申請」というのが載っているが、これはすごく楽しみというか、ものすごく本気で取り組まなければいけない、ハードルの高い目標であるということを上申しておきたい。恐らく、IBをやりたいと漠然としているようならば、そこの中に、まず100%英語がネイティブの留学生が数人クラスにいて、そしてIBを受けたい地元の子が、日常会話とかものの考え方から、ネイティブの英語に引っ張ってもらって、そしてIBを取得するための英論文を自分でスラスラ書けるとか、そのレベルまで要求されると思うので、教員も外国人とか、</p>

外国語の授業とか、かなり本格的なものになる。IBはインターナショナルスクールやアメリカンスクールでさえも皆が受かるものではなく、その中の20～30%の生徒がパスする位の難しいテストなので、するのであれば、ものすごく高い目標で、本気度が必要である。これも「探究科」を設置するのと同じ位、大きな変化になる気がする。

あと、資料8ページに「オフィスビジネス科」とあるが、英語を使う者としては「オフィスビジネス」という和製英語はどうかと思う。どこがおかしいかというと、英語の感覚では「オフィス」と「ビジネス」という単語は付かない。内容は一緒でも呼び方は考えて欲しい。「ファッション」も実は「ビジネス」はいらぬ。「ファッション科」でよい。カタカナにするのであれば、なるべく意味の通る英語を使った方がよいと思う。

苦野委員長

他にもう少しご意見があればお願いしたい。

池田委員

周りにどんな10代がいるのかで、話が随分違ってくると思う。私の周りにはどちらかというと、やっと学校に行けている、若しくは行けていないとか、休まないことに一生懸命、友達がいるかどうかで学校に行けるかどうか、というような10代が多くいる。もちろんハイレベルな子たちも必ず熊本にはいるが、この市立高校・専門学校に、どんな層が望んで来るのかとか、どんな層をターゲットに考えるのかというのも、少しベースに考えた方がよいと思う。私の周りにいるような、ようやく学校に行けるような子どもたちに関しては、どんな指導をする人がいるのかということが、とても大きくなってくると思うので、私たちには届かないところの話になるかもしれないが、どんなリーダーが来るのか、予算とカリサーチ力を含めて、そのあたりも見通せる状態で考えていくことも大事だと思う。ネイティブの英語を喋れる人がクラスにいたらとても楽しいだろうと思うし、そのベースを作るのにどんな人たちをどこから呼んできたらいのかとか、想像の範囲で、可能な範囲で考えいくのも大事だと思う。

苦野委員長

ありがとうございます。今回のテーマに関しては、まとめていくというのがなかなか難しいので、まずはたくさん意見をいただいて、そこから考えていくということになるかと思うので、全て貴重なご意見として記録して、次の肥やしにしていきたいと思っている。

続いて、専門学校についての検討をさせていただきたい。資料8ページについてご意見をいただきたいが、せっかくなので、川上委員からご意見があればお願いしたい。

川上委員

AIとIoTについて、今、総合ビジネス専門学校は2年間だが、これは2年間では学べないことだと思う。それを踏まえたうえで、資料10ページ「高校と専門学校の連携・接続」について、どのようなやり方が上手くいくかは想像できないが、これをやることによって、学ぶ年数を長くすると、社会に出て使えるレベルまでは、知識や技術を身に付けることができるのではないかと。

苦野委員長

本当に大事な指摘だと思う。この「教育効果を高める仕組みの検討」については、この後、じっくり1時間位かけて議論したいと思うので、その時にこの意見を踏まえながら、また議論をしたいと思う。

その他、専門学校についての意見があればお願いしたい。

荒瀬委員

大学もそうだが、日本の学校制度は非常にわかりやすく、そのわかりやすさが本当によいのか考える必要はあるが、この専門学校を、高等学校卒業生を対象とした専門学校のままにしておくのか、それとも様々なニーズに応じて入学できる学校にするのかということで、随分学校像というものは変わってくると思う。すぐそうなるかはわからないが、それこそSociety5.0と言われているが、そういう社会の中で求められる力というのが非常に多様になっていく。そうなった時に、具体的に学び直しということをしなければならない人たちが多分出てくると思う。そういう人たちも受け入れていくということであると、その必要性ということも違って来るし、また、高等学校を卒業した人と一定の社会経験のある人が一緒に学ぶということの魅力も大変大きいものがあると思う。そのあたりも踏まえて検討する必要があるのではないかと。

<p>苫野委員長</p>	<p>これはまた新しい観点である。これまで議論にならなかったが非常に重要な指摘である。今荒瀬委員がおっしゃったように、若者と社会人になって学び直しで入ってきた人との、世代を超えた相互作用というのは非常に大事である。関連して言うと、高校と関係するのだが、高校なので世代は同じだが、学科・コースであまりにも分けすぎて、同質性の高いコミュニティでいるというのは問題のような気がする。やはり学科・コース全体が常に混ざり合う仕掛けというのは、常に考えておかなければならないのではないかと思う。その観点から、専門学校で世代を超えた学びの場があるというのは大変素敵な教育環境であると個人的に思った。他はいいかがか。</p>
<p>田中委員</p>	<p>学び直しということからすると、私自身も学び直しをしている最中で、修士課程に一年前入って学び直しをしているところである。実際に、私よりも少し上の年代の方々とともに、夜集まってそれぞれの経験や新しく学んだことを話し合っ、お互いによい刺激になっていると感じる場面が多々ある。</p> <p>8ページの案では、「単位制総合ビジネス科」が離職者などの再就職に向けた資格取得という風になっている。やり方にもよると思うが、もしかしたら「観光ビジネス科」に興味を持つ社会人経験者もいるかもしれないし、「伝統継承科」に興味を持つ人もいるだろう。そう考えると、大学でもやっていると思うが、昼夜開講制という仕組みを利用し、社会人入試のようなものを設けて、広くたくさんの人に学んでもらえるような、しかも選択肢がいくつかあると、とても魅力的だと思う。</p>
<p>苫野委員長</p>	<p>よい議論になってきたと思う。</p> <p>今のところ、「地域」と「情報」という二つの枠が設けられているが、これで本当によいのかとか、他にあるのではないかという観点から聞きたいと思うが、川上委員いいかがか。</p>
<p>川上委員</p>	<p>根本から覆すようで申し訳ないが、科を作るのも一つの手かと思うが、それ以前に前回までにここで出た意見が資料に載っているかと思うのだが、今の現役の学生にどうい科が欲しいかと聞いた時に、ここに記載されていることに集中するかというと、もっと他の意見が出てくると思う。</p> <p>あくまで私見だが、基本は普通科で、その中に自由に学習する場を作り、その時間に本人たちがやりたい勉強をさせることで、生徒はそのことに特化していくのではないかと思う。</p>
<p>苫野委員長</p>	<p>それは専門学校の話ということでよいか。</p>
<p>川上委員</p>	<p>高校も専門学校も含めての話である。私が想像するのは、ここに書いてあるとおりになったとして、今と同じで、生徒が考えるのではなく、教えられる立場が続くのではないかということ。</p> <p>なので、もう少し深く掘り下げて、基本は変えずに、それに付け足していくのがよいのではないかと思っている。</p>
<p>田中委員</p>	<p>非常に興味深く聞いていた。「Most Likely To Succeed」では、日本では卒業研究にあたるような発表会の中で、一つの大きなものを作り上げてみんなに見てもらおうということをしてしたが、あのような活動が専門学校2年間を通じて、みんなのできるというようなイメージがあると、専門学校の方がよりフレキシブルな学びの組み方ができるのでと思うので、入って、自分の興味のある分野について学び、かつそのために必要になりそうなことを見出し、それを最後に形にしていく、そういう面白い学びができると思う。</p> <p>これからの時代は恐らく、一方的に教えられる時代ではなく、何かをアドバイスしてくれたり、背中を押してくれたりする先生がいるかもしれないが、あとは自分たちで学んで、切り拓いて、作っていく時代だと思うので、そういう仕組みづくりができるのと、もっとみんな専門学校に行きたいと思うのではないか。</p>

苦野委員長

あまり学科・コースを細かくしすぎると、お仕着せになる可能性があるということだろう。他にはいかがか。

坂本委員

話が非常に難しい方向にいつているが、当初どういう教育・学校が選ばれるかというような議論を前回までにしたと思う。そのために、こういうものであれば選ばれるのではないかという用意を、事務局でしていると思う。少なくとも、特に専門学校はそうであるが、スキルを身に付けさせようということで、どういう教育ができるかということメニューとして出すためには、学校側では教員や教育の設備を用意しなければならない、という考えがベースにあって、これを実際に進めるためにはどうしたらよいだろうかということ悩みながらここに出されていると思う。

そこで、入った人たちが自分たちで自由に学んでいくというシステムは、非常に画期的で非常によいと思うが、実際にどうやっていくのだろうかということがあまり想像できない。

我々経済界側としては、求められる人材として、こういう人が出てくるとよいなということを書いていく。それに対して、ではそういう教育をしていきたいと思いますという人たちがいて、「これだったら選ばれますか」という議論があつてきたのかと思う。

確かに素晴らしい発想とは思いますが、根本から変えてしまうと議論が難しいなという気がする。

田中委員

大学院生として学びつつ、教育現場の中で教えるという立場である。普段農業を教えており、教科書通りに教えていた時期があつた。ある時、「教科書を読めばみんなわかる内容を教えている、なんて虚しいことをしているのだろう」と思った。今私は、生徒になるべく考えてもらう授業を展開するよう工夫している。

今生徒たちは大体スマートフォンを持っているし、あらゆる知識にアクセスすることができるので、20年後30年後には先生が知識を教えることが求められなくなっていくと思っている。今の高校生と、これから入学してくる小学生、中学生が活躍する時代は20年後や30年後である。その時に、今提供している知識が本当に生かされるのか。今から20年前30年前にあつた職業で、今はないものもある。ユーチューバーという職業ができるなど誰も思っていなかった。経済界が求めているのは今の人材であつて、20年後30年後の人材ではないと思う。そうすると、私たちがすべきなのは、今ここにある要求に対して何か提供するのではなく、20年後30年後、40年後に活躍する人を育てていくことが必要であつて、そこを見越した発想をしていかないと、子どもたちはとても不幸なことになってしまうのではないかと思う。

荒瀬委員

今の話はきっと、「人材」と「資質・能力」の違いの話だと思う。

企業が求めるのは、「今何ができるか」だと思うが、それがいつまでもそのままかというところわからない。いずれ陳腐化する。その際に、自らがこれまでの学びの経験に基づいて、必要なことを新たに自分の力で学んでいけるような、そういう力を付けなければならない。それが資質・能力の話かと思う。

先ほどの話で、こういう学科を設けるといふのは、今まさにこれが必要だから設けようとしているわけで、ただ、ここで単にここにあることを教わったまま記憶して、その範囲は十分だ、というだけではなく、これに基づいて新たなものにも自分で取り組めるような力をつける教育課程を作る必要がある。その中で、あるまとまった時間において、学生が自分で考えて取り組めるような、そういう教育課程を設けていくということが、これからは見据えるという点では大事ではないかと思う。

その時に、先ほどの話に戻るが、多様な人がいる学校であれば、企業での経験がある人や、時間に余裕ができたから学校でもう一度学んでみたいという人の経験なども、これから生きる若い人たちにとっては大変刺激になっていくだろうから、そういうことも含めた柔軟なカリキュラムをどう作るのかということが大事になるのではないか。

吉山委員

会議の前に「Most Likely To Succeed」を観た。その中で、生徒が失敗しても担任の先生は教えず、自分で解決できるまで何か月も待っているという場面があつた。そういう勉強の仕方が生まれるような環境づくりを考えていく必要がある。



自分の子どもが今年から一人暮らしを始めたのだが、家庭科で習ったはずの簡単な家事ができず相談の連絡が来ることがある。生き抜く力というのが必要なのだろう。

学科を見ると、色々なものを提案してあるが、我々は熊本地震のことを子どもたちに伝えていく必要があるだろうし、それに対する備えも必要だろう。熊本市立なので、もっと市立枠も広げていって、先ほど川上委員がおっしゃったように、現場の生徒の意見もさらに組み入れて、資料の中にもあったが、学校・生徒・保護者・地域の方の連携が大事だと思う。

その都度変化があつて、変わっていてもよいのではないかと。30年も続くというのではなく、何年かに一回、見直し検討してもよいと思う。あまり多くの科があると、志願者が一人も来ないということもあると思う。

永村委員

教育にフォーカスしているところだが、少し視線を外して、今私たちが行っているプロセスは、飲食店がメニューを決めるプロセスに似ていると思う。飲食店では流行や時代の流れ、価格やコストパフォーマンスに敏感でないといけない。どこの店に行くと、何が美味しいということがわからないと、まずお客さんが来ない。そして、レストランに入って、メニューを広げて、色々なメニューがあつて何を選べばよいかわからないというのは、ありがた迷惑なところがあり、何か色々あるが、さして記憶に残らないような感じである。

今、中学校の保護者や生徒が市立を選んで、市立で学びたいという時に、失礼だが、私たちが日常、宴会をどこでするか、いくらのコースにするかを決めるプロセスに似ていて、何が美味しく、何がきちんとしているのかということが、外から見てわかりやすいものであつてほしい。キラーコンテンツというか、「ここに行ったらこれを学ぶべし」、というようなものがあり、そしてそこに行く楽しく、学べ、人間的にも成長できるような、わかりやすいラインというのも大事ではないかと思う。色々な思いを詰めてコースを細分化したり、色々な人に広く浅くアピールしたりするようなものよりも、もし保護者ならどこの高校に行つて何を学ばせたいかというのがわかりやすいもの。教育の枠から一歩引いて、自分の生活の中でわかりやすい選択プロセスに置き換えてみるような考え方もあるのではないかと思う。市立として何を選べばよいのかわからなくなつてきている。

坂本委員

永村委員の話聞いて、言いたかつたことがスーッと入つてきた気がする。2ページまでに記載されている、これまで出てきた意見は、それが展開されてこうなりましたというのが、あまりにもメニュー豊富で、委員長が最初におっしゃつた、今後検証していく時に、どうするのだろうと思う。この中の一つ二つくらい出来ればよいような、そんなかなり理想なことが書いてあつて、さらには今もっと深い議論が出てきたことも含めてかなり難しいのではないかと。

教育哲学的なことはベースに置くべきだが、もっと市立であることの売りを前面に出して、こんなことをやるとよいのではないかとということをお答えすると、我々としてもその後の検証も非常にしやすくなるのではないかと思う。事務局はこれをするための教員の確保をどうするのか、いつまでにこれを実現するのか、今ここで議論している人材育成が出来上がるころには陳腐化しているのでは、といったことが気になる。

永村委員

またIBの話に戻るが、IBを導入するとなると、これは例えばA5ランクの特上肉だが、一方でビュッフェスタイルのような、自分で好きな科目を選ぶ単位制もある、なんでもありのレストランのようになっていくように感じる。

苫野委員長

もう少し限定した方がよい、市立ならではの特化すべきところをもう少し絞り込むイメージということか。

田中委員

私はお二人と全く違うイメージを持って話を聞いている。飲食店のメニュー選びと高校選びは全く違うものだと思っている。なぜかという、飲食店で何かを食べるとそれで終わり、美味しい美味しくないという結果がすぐに出る。教育の効果というのはわからないもので、20年経つても30年経つてもわからない場合もある。経済の専門家からすると、費用対効果が出るかどうかわからない分野で、非常にその効果を測定しづら

い分野であり、飲食店ではちょっとイメージをしにくいと思う。

様々なメニューがあって、どう選べばよいかわからないというご指摘があったが、私は自分の時間割を自分で作る高校に通っていたので、自分で科目を選択する必要があった。実際に、自分の興味にすごく偏ったような科目選択をした部分もあったが、自分が何をしたいのか、何を学びたいのか、どんな人間になっていきたいのかということを考えてながら科目選択を行った。昨年、私の先生に会い、総合学科の学びの中で何が最も生徒により影響をもたらしたと思うかと伺ったところ、「科目を選択させたことだと思う」という答えであった。科目を選択させたことによって、自分が何を学びたいのか、これから自分の人生をどうプランニング、デザインしていくのかということをしごく学ぶ機会になったという話をしていた。

考えてみると、今の現役世代の働いている人たちというのは、あまり自分で選択する機会が与えられてこなかったのではないかと思っている。というのも、また飲食店の話に戻って恐縮だが、どれを食べればよいかわからないお客様がとても多く、私は、「お客様のお好みに合わせてお選びください」と言う。「どれを食べればよいのかわからない」「お薦めを出してくれ」と言われるが、自分としては全て食べていただきたい。ただ、お客様によって、たくさん食べたい人もいるし、辛い物が好きな人もいるし、変わった物が好きな人もいる。それぞれに対してメニュー展開をしているので、皆さんの今の気持ちに合わせて選んでいただきたいと伝えるが、こちらが決めてほしいと言われるお客様がいるので難しいところである。

福西委員

前回までの議論をここまでまとめてあり、私が若かったらこんな高校に行ってみたいととても思ったが、特にIBなど本当にできるのだろうかとも正直思っている。

一方、今回とてもよいなと思ったのが、通信制や学び直しが入っていることである。市立高校に行けば、友達との関係で学校に行きにくくなった子でも、サポートしてどんな子でも高校卒業まではできるのだとか、年をとってからもう一度学び直しをしたいというのをサポートするのがとてもよいと思っている。

こんな映画の中のようなすごいことができればよいと思うが、本当にできるのかどうか、一市民として見た時に、やるとするならばとてもお金もかかるだろうと思う。しかし、どんな子でも、どんな人でも、高校で勉強したり、専門学校で専門的なスキルを磨けたりするというのは、とても魅力的だし熊本市らしいと思う。

山川委員

私の頭の中では、卒業式の時に何を子どもたちに話そうかということが、ぐるぐる回っている。この資料を見て思ったことは、非常に多様な意見が出たこれまで二回の議論が、非常に考えやすくまとめてあるなということである。昨年、一昨年の卒業式で私が言ったことは、今子どもたちに求められているのは、「生きる力」ではなく「生き抜く力」、わかりやすく言うと「どうにかする力」ということ。小中学校でも探究学習をするし、しなければならない。それを高校では、もっと具現化する、スパイラルの学びをしなければならない。だからこそ全ての教科でと謳ってある。だから、せっかくこれを整理してもらったので、これを今の高校・専門学校に色を付けていくという形で、もっと焦点化していけば、その色が子どもたち・保護者にとって魅力となって、受けたい高校、受けたい専門学校になるのではないかとと思う。

川上委員

先ほどの話に戻るが、飲食店というのは多分例えだと思う。同じ飲食店で例えると、この資料の学科の名前は仮称となっており、これを全て作ろうとしているのではなく、想像の形をここに書いてあるのだと思う。総合ビジネス専門学校という店があり、ここに書いてあるコースが料理だとして、メニューに書いてない料理を頼もうとした時に店側がそれを提供できたら嬉しいと思うのではないかと。そういう柔軟性が大事だと思う。

生き抜く力や、人材ではなく資質・能力というのは、簡単に言うと1聞いて10を知るタイプの人間を育てて欲しいということだと思う。いかにその道に持っていけるかということをお話していきたい。

荒瀬委員

飲食店の話が出ているが、比喩というのは非常にわかりやすくよいが、間違えるとその比喩の内容の中で物事を考えてしまう傾向ができてしまう。これは飲食店の話ではなく、学校の話をしているということをお改めて申し上げたうえで、今おっしゃったよ

うにこれは一つの例である。つまり、我々がやるべきことは、これはいらないのではないかと、もっとこういうものを足したらよいのではないかとということが、今後の専門学校の有りようを考えていくうえで非常に重要で、事務局にそういったタネをお届けするのがこの会の責任ではないかと思う。

それともう一つ、専門学校は一条校（事務局補足：学校教育法第一条に定められた学校のこと）ではない学校である。であれば、高等学校と同じように話をするのは難しいと思う。専門学校であるという中で、何を置くのか。高等学校でやるべきことと、専門学校でやるべきことを、分けるのか分けないのか。高等学校までで何をすべきかということと、一条校でない、本当に専門的な知識・技能をしっかりと身に付けてもらうための、その中にはそれこそ様々なことを何とかしていくような、そういうことを専門の中で力を付けるようなカリキュラムが必要になるかと思うが、そこは分けて議論した方が具体化しやすいのではないかと思う。

#### ※学校教育法第一条

この法律で、学校とは、幼稚園、小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校、大学及び高等専門学校とする。

苫野委員長

ありがとうございます。次に移る前に私の方から少しまとめつつ、一応専門的知見からもお話しできたらと思う。これはまさに例であるということだが、考え方をまた少し柔軟にしてはどうか。

今までの議論を総合的に、哲学的用語でいうと「アウフヘーベン」していきたいと思うが、まさに川上委員がおっしゃったように、レディメイドで決まっていたら、その枠でしか考えられない。むしろもっと、生徒たち一人一人の色々な課題に応じて自分たち自身の探究ができたらいという思いがある。考え方として、表の右側の「〇〇科」というのは、生徒をこの中に入れるというよりは、「この学校にはこの専門家がたくさんいる」ということ、そして生徒たちが自分で探究のテーマを見出し、問いを作り、自分たちで探究していく過程でこの専門家を存分に活用できる、というイメージはどうか。その時に専門家集団がいて、例えば「ファッションで起業したい」といった生徒がいた時に、ファッションの専門家だけじゃなくて、ほかの専門家もいて、タッグを組んだらこんなバックアップもできるかもしれない。私はよく「これからの教師は共同探究者、あるいは探究支援者である」と言っているが、そういった、探究支援者としての先生という人材が揃っていて、しかも外にネットワークもあって、生徒たちの探究が真ん中であってそれをさまざまな専門家やネットワークが支えていくというイメージにしてみると、こういった「〇〇科」みたいなものが若干生きてくるのかなという気がする。これはまさに荒瀬委員が指摘されたように、専門学校と高等学校はある程度分けて考えていく必要があり、専門学校はある程度ラディカルにできると思う。

高校も似たような形でカリキュラムを作ることができて、これが15年、20年ぐらいのスパンでカリキュラムの編成、設計思想が変わっていくと言っている。今までは「これが学ぶべきことです」「テストして定着を図ります」という「予め」の思想だったが、英語「Most Likely To Succeed」に登場したアメリカの認知科学者によると「テストのために覚えたことの90%は忘れてしまう」、これは本当のことで、実際に私が学生に昨年解いたはずのセンター試験の問題を解かせたところ、忘れていた。ところが、探究をしたら、探究の過程で身に付いた知識だけではなく、やり抜く力とか、人の力を借りる力とか、目に見えない生き抜く力とかが付いてくる。これはいろんな研究でわかっていること。そうすると高校も市役所というリソース、その専門家のネットワーク、教師とか、いろんなリソースがいっぱいあって、生徒たちはそれを存分に活用しながら探究していく。そうすると古びれない知識をその時その時に生徒が中心となって身に付けることができる。そういう、「予め」のカリキュラムの設計思想から、「あなたたちの探究にはこんな価値がある」「こういう内容が学べた」といった「後追い」の評価、カリキュラム設計思想というのがこれから確実に主流になってくると思うので、こういった形でこういったものを作っていくことも可能。そうすると今まで議論で出たものが、統合されたアイディアとして提案できるのではないかと思う。

荒瀬委員	<p>今委員長がおっしゃったことで言うと、ここから外れるものがいくつか出てくる。例えば「グローバル探究科」というのは「予め」のもの。「探究科」は「探究科」だけでよいはず。どんな高校であっても探究はしていく。「探究科」というのを作るのであればそこでカリキュラムを作るわけだが、それが「予め」ではなく、「後追い」の発想になっていく、ということは、答申にもぜひ盛り込んでほしい。</p> <p>答申は単に高等学校や専門学校の新しい在り方ではなく、高校や専門学校は義務教育の先にある教育の場。具体的に熊本市の小学校、中学校が、どのような教育を大事にしていくのかという方向性を示すことにもなる。その意味では、国際だから「グローバル探究科」というのは発想としては極めて杓子定規。もっと単純化した、抽象化した名前の方がいろんなことができ得る可能性がある。ただし、「じゃあ何をやってもよい」ということにはならないので、そのところが、細かいところだが、一条校かどうかということもあるし、学習指導要領は現にあるわけだから、その中でどう考えていくのかということを経ひ事務局としては考えていただきたい。</p>
苦野委員長	<p>ありがとうございます。その過程で「市立ならでは」というところが大事な観点となってくる。「市立ならでは」で、ここにある程度強みがある、そのうえで豊かな探究ができる土壌を作るというのは大事な発想のような気がする。</p> <p>残りが30分しかないが、次の課題は9ページから13ページの「教育効果を高める仕組みの検討」ということで、中高一貫であるとか高校と専門学校の連携・接続といったアイデアであるとか、前回までの議論でいくつか出たわけだが、これらについてどう考えるかということを中心に自由に討議していただきたいと思う。</p> <p>荒瀬委員は中高一貫の有効性をおっしゃっていたので、よろしければ口火を切っていただきたいが、よろしいか。</p>
荒瀬委員	<p>中高一貫というものは落ち着いて長いスパンで物事を考えることができるので非常によいと思っている。そういう意味では10ページに書いてある高等専門学校あるいは高等専修学校も5年間という想定なので、こういったこともすばらしいと思う。ただ、中学校卒業段階で選択ができるかということ、それはなかなか難しい。私は国立高等専門学校に関わっていたので、その経験から言うと、やはり不調をきたす生徒が一定割合いる。中学校から高校に行くときに、普通科というのは幅が広いが、高等専門学校化すると5年間そこで本当に学べるのかどうかとなるので、そこは難しい。難しいけれども、中学校でしっかりと進路指導をしていただく、情報提供もきちっとやっていくという意味で言うと、一定のスパンがあるのが非常に大事だと思う。</p> <p>踏み込んだことを言うが、11ページから後の話はここで検討すべき話なのだろうかと思う。2校を1校にすべきだとか、2校は2校のまま置くべきだとか、そういう話はやや僭越な気がする。そういうことは学校と教育委員会が話しをして、その中で教育効果が最も高まるというのであれば単位制を導入するという選択も生まれるのではないかと思う。</p>
苦野委員長	<p>ありがとうございます。私たちでどこまで答申すればよいのかということも悩ましいところで、今おっしゃったことは同感である。</p> <p>それを踏まえてご意見があればお願いします。</p>
田中委員	<p>中高一貫校については詳しくないのだが、危惧しているのはエリート校化してしまうのではないかということ。熊本県内にもいくつか中高一貫校はあり、倍率も高く近隣のお坊ちゃんお嬢ちゃんが行くところというイメージがある。限られた階層の限られた人たちが行くような学校になってはいけないなど。感覚的な意見で恐縮だが、塾に行かなくてはならないような学校になっては嫌だと思う。「お受験」のような、なんだか違和感がある。形態としての中高一貫校は興味深い。これからたくさん中高一貫校が出来てくれば、ある一定の階層にしか行けない学校というようなイメージはだいぶ薄まるのではないかと思う。</p> <p>もう一つ、11ページ以降についての話もあったが、私は通信制課程は強く希望しており、集団で授業を受けることに困難を感じる子どもたちが一定数いるのは事実であり、そのような子たちが学ぶ一つの選択肢として通信制は公立で、市立であるのであれば</p>

	<p>すばらしい選択肢になると思う。</p>
荒瀬委員	<p>ニーズがどこにあるのか、ということに対応するのが市立学校の責務だと思っている。市民のニーズに対応しない学校は熊本市が自費で作る必要はないと思っている。市民のニーズに基づいて作った中等教育学校に、ある階層の方が行きたいとおっしゃったからといって、それがだめだとは思っていない。そういう意味ではニーズがどこにあるかということ。一般的な公立高等学校を作るのは熊本県に任せればよいわけである。なぜ市立学校があるのか、これが「市立ならでは」という言葉にもつながっていくと思うので、そこのところはぜひお考えいただければと思う。</p> <p>もう一つ、「通学制に行けない生徒だから通信の学校に行きなさい」というのも単なる振り分けだと思う。そうではなく、現行法上はできないのだけど、通学制の学校で、行けなくても単位を認めていくという工夫を、私たちはしていくべきだと思う。これはまだまだ先の話になると思うが、今、国で行っている高等学校の議論の中で、「学校ってそもそも毎日行かなければならない所なのか」というような議論もやっている。そういう発想で言うと、今の学校でも、行けないけれども、ちゃんと学ぶ機会が与えられて卒業できる、3年で卒業できず4年かかった場合でもそれを社会が受け入れる。そういった社会全体の構造を含めた有りようというのを模索していく必要があるということを思っている。</p> <p>通信制については、もちろん現行の制度の中では重要なものだと認識している。</p>
苫野委員長	<p>ありがとうございます。非常に重要な議論になってきたと思う。</p> <p>他に別の観点からでも意見はないか。</p>
永村委員	<p>11ページであるが、私は2校の一体化について口火を切った本人だが、就学する生徒の数、人口が半分になることは、よほどのベビーブームや移民などの変化がない限りは今の統計学で予見できている。1校に統合するのも突然ではなく、この表で見ると一番ソフトなものが(ウ)(2校での連携)で、中間が(イ)(キャンパス化)、最も極端なものが(ア)(1校に統合)となる。50年間の間に段階を踏んで、(ウ)から(イ)、それから(ア)に、など、どちらか1校を持って余すくらい人口が減ったら(ア)となるといった、ゆるやかな統合に行く道筋みたいな感じで、市立2校を運営するうえで頭の片隅にでも置いておくという考え方でよいのではないかと思う。</p>
荒瀬委員	<p>今のお考えは当然あると思う。ただし、私は現実的ではないと思っている。高校の定員を考えるのは熊本県教育委員会であって、熊本市教育委員会ではないということ。市民のニーズということに根差して熊本市が何をやっていくのかを考えていくので、一般的な少子化の流れというのと、市立高校をどうしていくかということは、少しだけ分ける必要がある。</p> <p>それと、2キャンパスというのは、どんなよいことがあるかということ、校長が一人だけになる、人件費が若干抑えられるということにしか過ぎない。</p> <p>やるのであれば、はっきりと統合する。教員の数も減らせる。そういう意味で、段階的にというのは必ずしも現実的ではないと思っている。</p>
永村委員	<p>人口の減り方で、今は千原台が少し定員割れしている程度で、今の段階で統合する必要は全然ないと思うが、50年先を考えたら人口が半分になっても2校を維持するのかと考えた時、どういう風を集約していくのかという道筋を今から考えていてもよいのではないかと考えている。</p>
荒瀬委員	<p>それはそう思う。</p>
苫野委員長	<p>前日も議論になったのだが、県内で高校生を取り合っても仕方ない、でも外部から、それこそ熊本市民の「熊本市にいっぱい若者がいて活性化して、県外からでもたくさん来て欲しい」というニーズがあれば、そういう魅力的な学校をつくって県外からでもたくさん来てもらえば統合する必要もなく、2校でどんどんやっってもらうという可能性もあるので、いくつかのシナリオを考えておくのもよいかもしれない。</p>

	他にいかがか。
田中委員	<p>熊本市として1クラスを少人数化するという事は現実的なのか。先ほど特別な支援を要する子の支援についても話が出たが、もっと現場の先生たちが特別なニーズについての理解が広まり、相応の手立てをみんなができるようになれば、今不登校になっている子どもたちがだいたい学校に行けるようになるのではないかと考えている。</p> <p>また、以前に勤務した県では、高校の1学年では1クラス40名を二つに分けて20名で授業を行い、試行的な取組だが、一年間だけ県から加配が来て、クラスがだいたい落ち着いたということがあった。すごく効果の高い手立てだったが、熊本市として1クラスの人数を市独自の試みとして減らすということがもしできれば、それで選ぶ子どもも多分いるだろう。制度については詳しくないが、必由館と千原台の定員を調整して少人数としてはどうか。</p>
苦野委員長	<p>大事な観点であり、意識に留めておきたい。当事者である川上委員も高校と専門学校の連携という話もされていたが、何か加えて言いたいことはないか。</p>
川上委員	<p>先程から、他の委員の意見を聞いて、まとめた方がよい、まとめない方がよいといった、それぞれの意見があつてよいと思うが、考え方としてはそうではないと思う。見えているようで見えていないのではないか。50年後にどうなるかなんて誰にも分からないし、想像でしか言えない。その時に「こうなったら、こうしよう」ということを踏まえておけばよい。例えばこの先、子どもが減り続けるかもしれないし、もしかしたら何か起きて増えるかもしれない。その時に、「こうなったらAのようにしよう」「こうなったらBのパターンをとろう」とか、パターンをいっぱい決めることが大事だと思う。1つのパターンに限定しているから話がまとまらない。いくつかパターンを考えることが大事だと思っている。</p>
苦野委員長	<p>シナリオ的な発想だと思う。高校生の委員から何かないか。</p>
野副委員	<p>今の時点では、11ページでは(ウ)(2校での連携)でよいと思っている。少子化で定員割れになってきたら、県外からも生徒をどんどん受け入れてよいと思っている。その理由は、2、3年前、秀岳館高校が大阪から生徒を受け入れて、野球部が甲子園でベスト4になり、一時期、熊本が活性化したと思うので、生徒を県外から呼び寄せて、熊本の認知が上がればプラスになると思っている。</p>
苦野委員長	<p>市立高校の超魅力化によって県外から人を呼び寄せる、それも1つの方法。設置形態のことや改革を支える取組・条件整備についても意見をお願いしたい。</p>
福西委員	<p>もし、資料に書いてあるような魅力的な高校ができたなら、若い人はきっと行ってみたいと思うと思うだろうが、親としては何だか不安で、「普通の高校がよい」とも思ってしまう。どうしても先駆的などころで勉強しても、結局、今の社会はまだそこまで追い付いていないので、自分の子どもが大学入試で損したり、かわいそうなことになったらどうしようなどと思う保護者はきっと多いと思う。その時に、「そうではなくて、これはすごく大きなチャレンジで、絶対、生徒のためにもなります」というような広報の充実が、ホームページや学校説明会を超えたような、市民全部で「市立高校の取組ってすごい」と盛り上がるような、市長がツイッターで毎日言ってくれる位の広報がないと、保護者の中には、子どもが「行きたい」と言っても、止めてしまう人もいるかもしれないと思った。</p>
田中委員	<p>以前、普通科、専門学科に加えて総合学科がスタートした時に、多分、当事者の人たちはそのような心配を抱えていたのではないかとと思うが、蓋を開けてみれば、入試の倍率は5倍、6倍といったすごい倍率だった。ただし、特徴的だったのが、女子がとても多かった。今でも総合学科は、女子の方が多ようである。熊本県内にも、総合学科として翔陽高校や、八代、天草にもあり、規模的な大きさでいうと翔陽高校が一番大きいと思うが、一時期定員割れして厳しいこともあったが、今は倍率が持ち直した。私はそ</p>

の時の当事者であるが、恐らく管理職のリーダーシップが大きかったと思う。他にメディアへの露出、地域との連携の仕方とか、それらが功を奏して、熊本では珍しい総合学科に子どもを送り出そうと思う保護者がたくさんいた。子どもたちも総合学科に行きたいと希望を持って進学先に選んだ。必ずしも新しい形態の高校がその足を踏まれるばかりではなく、上手なPR方法、上手な売り出し方、連携などがあれば選んでもらえる。教育委員会としてのPRももちろんだが、強力なリーダーシップを発揮できるような校長なり管理職を、県など各地からヘッドハンティングするなどして人材を集めることを積極的に行ってもらいたい。

荒瀬委員

学校経営はチャレンジではない。チャレンジするのは良くないと私は思っている。企業経営なら失敗しても社会的責任の取り方があるが、学校経営は失敗すると、責任の取り方がない。そこにいた生徒たちの一生に影響する。先ほど飲食店の例と一緒にしない方がよいと言ったのはそういう意味もある。生徒はチャレンジするかもしれないが、学校はチャレンジしないで、約束したことはちゃんと守らなければならない。それは3年後にどんな資質・能力をつけるのかということと、どういう進路実現をするかということ。入ってくる生徒が不登校の生徒であれば、その子たちが社会化できるような具体的なカリキュラムを作って、約束したこと、つまりカリキュラムをきちっと守る姿勢がなければいけない。約束をすることで、必ず保護者には信頼される学校になる。その約束を疑わしいと思う方もいらっしゃるだろうが、誠意を込めて伝えていく。広報とか宣伝といった言葉ではなくて、きちっと伝えていくことが大事であり、その姿勢がないなら学校を作ってはいけないと思っている。熊本市がこのような形でいろんな意見を聞きながら作っていく学校は、市民に対する約束をするのだから、ものすごく大きな責任がある。その責任の下で、関わる先生方も一生懸命やっていかれると思うから、恐らく新しい学校も安心して子どもを通わせることができる学校だと思う。それは日常ですぐにわかることである。

坂本委員

熊本市立の高校であるという存在意義を突き詰めていけば、1校なのか2校なのかというのは、それぞれの必要性が分かっていたら2校のままであり、県立があるのに市立が必要なのかという圧が強まってくる事態になれば2校を1校にする話も出て来るかもしれない。それは我々がここで議論するのは早いのではないかと。教育効果を高める、高めないの話ではない。

専門学校と高校との連携は2年間でできないことを、助走というか、高校時代からその方向で行って、専門学校に飛び込んでくるというのは教育効果が高まるのかなという気がした。通信制は多分皆さんから求められている雰囲気があったので、そういう意味では不登校に限らず社会人の学び直しという意味でも、あればよいという気がする。

広報、PR宣伝で、人集めではないにしても、少なくとも委員長が熊日に書かれている「くまにち論壇」を読むと、みんなが「なるほどこんな議論があっているのか」となる。そうことも含めて、例えば答申が出来上がったときは、委員長がテレビにずっと出演して「こんな方向で行こうと思って答申を出した」と話すなどして市民に伝えていくと、「確かによい改革が進んでいる」と、中身が正しく伝わるかもしれない。

永村委員

今の意見に加えて、IBに関して、私はIB経験者なので申し上げると、IBのカリキュラム自体は2年間だが、高校2年生から初めて3年生の終わりに受けるのはとても大変なので、中高連携するなら中学校の時からIBプレパレーション、準備の教科をやるなど、最短でも3年はかけた方がよい。その点で言うと、専門学校と市立高校がリンクするのも大事だし、ITみたいな膨大な科目に5年費やすのもわかる。本気でIBをするのなら中学の時から外国語に触れさせ、英語で教科書をスラスラ読めるような頭にしておく準備期間が必要で、中学との連携がよいと思う。

14ページについての意見だが、折衷もできたらよいと思う。必由館を④「探究科」、千原台を③「単位制総合学科」という組み合わせのパターンがあったらよい。

苫野委員長

最後に、これだけは言っておきたい、ということがあるか。

田中委員	<p>入試制度については是非検討していただきたいが、今までの出欠の数とか成績だけに偏った入試制度は検討し直して欲しい。</p>
苫野委員長	<p>それも大事な点である。</p> <p>1回目の議論の時も意見を広げて、2回目でごつとまとまった。今回3回目で、またいろんなものを広げて、次に答申に向けてまとめていくことになると思う。その時に、荒瀬委員もおっしゃったように、この中で取捨選択する、色々出てきたアイデアのなかで本当に集中すべきところは一体何なのかを考えることが次回の大きな仕事になってくる。荒瀬委員がおっしゃった学校経営、学校づくり、それは覚悟がいる、生半可なことではなく、大変責任の重いことだと改めて認識しなければならない。その意味では教員の資質向上もテーマであったが、すごく大事で、いつも言っていることだが、上から突然「やってください」と言われてもできるはずがない。現場の先生たちと一緒に作るのだ、一緒にみんなで意見を出し合って作っていくのだという姿勢はずっと忘れずにこれから続けていきたいと思う。</p>
〔閉会〕 苫野委員長	<p>時間となったので、ここで本日の議論を終了したいと思う。</p> <p>今回は3月頃、答申案をもとに議論し、答申をまとめる予定である。</p> <p>後日お気づきになられたことなどあれば、教育委員会事務局・学校改革推進室にご相談いただきたい。</p> <p>なお、本会議の議事録については前回同様、事務局にて作成の後、委員の皆様へ送付されるので、ご確認いただくようお願いする。</p> <p>では、これをもって第3回 市立高等学校等改革検討委員会を閉会する。</p>